

九、誠の華

ある朝、釈迦如来は、王舎城の阿闍世王の宮殿に行こうと思われて、祇園精舎を出られました。歩きながらも、人々に説法をせられて昼前になって王宮にたどりつかれるようになりました。その時一人の園守が、花を花籠に入れて園を出る所であったが、道端に立つて仏陀の説法を聞き、大変に感動し、信心歓喜の思いがこみ上げて来ました。そこで思わず、手にしていた華を悉く仏の上に散らして、仏徳を讃嘆し供養しました。華は空に上つて天蓋のようになって、仏の頭上にかかつて仏を莊嚴しました。

そこで仏陀は、園守に向かって説いて言われるには、

「汝は、過去世において既に九十億の仏を供養した。これから後更に百四十劫の後、覺を開いて覺華如来という仏になるであろう。」

と授決されました。園守は驚いて、合掌礼拝して歡喜するのでありました。

けれども園守は、気がついて見ると大変なことをしたと心配になって来ました。園守は昨夜、阿闍世王から、明朝は園から美しい花を持って来るように命じられていたのであります。王も亦仏陀に献華しようと思っていたのであります。その王の勅によつて園からとつて来た花を、思わず仏に捧げてしまったのであります。王は怒り易い人である。それを思うと園守は恐ろしくなつた。このままで王宮にゆけば、王は怒つて殺すにきまつている。すつかりしょげてしまつて、力なく花籠を外に投げ棄てておいて、家に帰り妻に言いました。

「おい、おれはまだ朝から食事していない。それにおれは大変なことを仕出来したから、大王様に殺されるに違いない。これから殺されに行くのだ。今生の思い出に食事をさせてくれ。」

妻はおどろいて、

「それは又どうなさいました。」

「いやおれは今、道に立つて、仏様のお説法を聞いている中に、あまり有難いので、つい思わず園からとりたての華を全てみ仏に捧げたのだ。だが考えて見ると、それは大王に持つてゆかなければならない花であつた。」

「まあどうしましょう。」

と妻は泣きながら、それでも台所において食事の用意をしようとしてました。

するとその時、帝釈天は天宮から下りて来て、外においてあつた花籠の中に、天華を一ぱい盛つておきました。妻は食事を調べて、ふと外を見ておどろいた。

「まあ、来てごらんなさい！ 花籠には美しい花が一ぱいです。」

園守はびつくりして飛んで出た。見れば、色も香も全くすぐれた華でありました。

「おお不思議だ。これは人間の世界に咲く華ではない。きつと天の華にちがいない。」

園守は命拾ひしたことを喜んで、食事も何もほつておいて王宮へと急ぐのであつた。その時、王は、仏を迎えるために、道へ出かけていた。園守は、華を大王に献じました。する王はつくづくと華を見ていましたが、急に怒つて、

「我が園には、こんな美しい華があるのに、汝は今日まで何故、一度もこんな美しい華を持つて来なかつたのか。不都合な奴だ。汝の罪は死に値する！」

王の権幕はするどかつた。しかし園守は恐れなかつた。

「大王よ。王の花園にはこんな美しい華は咲きませぬ。又私の手によつては、こんな好華を作ることとは出来ません。実は今朝、園から花を取つての帰途、大道に立つてみ法を説かれる仏様にお会いし、歡喜のあまり、我を忘れて、花のありたけを、お供養してしまいました。仏様はその時、私にその功德によつて百四十劫の後、覺華如来になると記を授けて下さいました。しかし私に帰つた時、私は大王様に殺されるであろうことを思つて力を落として、今生の名残の食事をしようと思つて家に入りました。ところが不思議に、外にあつた花籠の中にこんな美しい華が満たされてありました。これは決して人間の華ではありません。全く天華であります。大王よ。私は今は卑しい花作りであります。けれどもこの度、仏様から成仏の記別を与えられましたから、死なば天上に生まれて、何の束縛もなく十方諸仏に供養し、道を修めることが出来ます。私は今の卑しい不自由な身よりも、自由に道を修められる世界がいいと思ひます。どうか殺して下さい。大王様に今殺されても決して悲しいとは思ひませぬ。」

と述べたので、大王はこれを聞いて慚愧し、園守を敬う心をおこしました。

こんなことがあつて間もなく、仏陀は王宮にたどりつかれ、飯食の供養を受けて、祇園精舎に帰つてゆかれました。しかし王には、何等の記別をお授けになりません。大王は祇婆大臣に問うていうには、

「私は先にも多くの燈を献供したのに、成仏の記別は、かえつて、一燈を供えた貧女²に与えられ、今日も亦、私は何ものも授けられないで、あの園守に記別を与えられた。私にはわからぬ。一体何故、私のすることは功德にならないのであろうか。」

大臣はこれに答えて言いました。

「大王よ、あなたはいくら福德をつまれても、それは何時もあり余つた国庫の費用を使い、人民に言いつけて供養せられるので、大王自らのお骨折りがはいつていません。その上、大王の心は、これによつて、たかあがりして、瞋恚の心をおこされます。そんなことでは決していくらなさつても、功德が功德になりません。だから仏陀は授記せられないのであります。」

と厳しく申し上げました。王は愧じて、どうすればいいと問いました。そこで祇婆は、

「本当の福德を積もうとなさるなら、あなたの体につけていられるものを供養し、瓔珞や、七宝の宝環などを脱いで、それを以て夫人や太子と共に自ら宝華をつくり、それを心から合掌して仏に捧げられたならば、仏陀は大王の眞実をお知りになつて成仏の記別を授けられるであります。」

と答えましたので、王は身につけた色々な宝をはずし生活の費用を節約し、夫人や太子と共に長い間かかつて美しい宝華を造られた。九十日かかつて出来たその宝華を仏陀に献供しようと思はれたが、仏陀はその時まで、拘尸那揭羅城外、跋提河の西岸、沙羅双樹の下で泥オンにおかくれなさいました。

大王はこれを聞いて大いに悲しみ歎いていたが、

「この華は私が一心を打ち込んで造つたものである。たとい仏は泥オンにかくれ給うといえども、これをもって耆闍崛山に上り、仏陀の御坐所にむかつて、私の心を捧げたい。」

と言いました。これを聞いた祇婆は、

「仏陀は、色身でもなく、泥オンでもない。」

唯、至誠心の者だけが、仏をば見奉ることが出来るのであります。

たとい、仏陀の現身が世間にましますとも、至心のない者は仏を見たてまつることは出来ない。

大王は今、心から真実によつておの供養を捧げようとなさるのでありますから、たとえ仏は泥オンにかくれたまうといえども、必ず仏を見奉ることが出来るでありますよう。」

と慰めはげましました。そこで大王は耆闍崛山に赴かれると、果たして仏陀を見奉ることが出来ました。大王は、泣かんばかりに喜んで、涙ながらに合掌して、七宝の華を仏陀の上に散らしました。

華は空中にかかつて、宝台となり、仏の頭上を被い莊嚴した。そこで仏陀は王にむかつて、

「汝は、この功德によつて、この後八万劫を経て、喜観という劫に、淨其所部如来といふ仏になり、刹土を華王と名くるであろう。」

と記別を与えられるのであります。

時に王の皇太子の梅陀和利は八歳でありましたが、父王の授決を見て心から喜び、身につけていた諸の宝を脱いで、仏陀の上に散らして願をおこすには、

「私は、その淨其所部如来の時代に、金輪聖王となつて、如来を供養し、如来の滅後には私がつづいて仏になりたいものであります。」

と。すると、太子の散らした宝は、化して交露の帳となつて仏陀を被うたのであります。その時、仏陀は、

「汝は必ず願の如く、大王の成仏する時、聖王となり、寿終われば兜卒天に生まれ、その後下生して華王の刹土に於いて梅檀仏となるであろう。」と授決されました。父子それぞれ成仏の記別を与えられ、恭しく礼拝するや、仏陀の御相はかきけされてしまいました。

華は何時も美しいものの代表である。真実の心、それは確かに煩惱の泥中に咲く華である。形の盛大を誇ろうとする富者の似而非供養よりも端的に自己を投げ出しかかる園守の方が、仏陀に近いとは、思わねばならぬ教訓である。真実とは魂のぬけた形式ではなくて、ささやかなる営みにも至誠の電光のひらめくことである。

真実の一道を歩んで行き詰まったところ、帝釈天は来たつて、真実の上に道と權威を与えた。真実は必ず末通る。真実に対する信念は、大王の前にすら強かつた。

不真実なる者も、唯内に内省し懺悔することによつて、自己本然の相にかえる時、やがて生きてゆける世界がある。大王もその皇太子も、やがては仏陀の心に通うこと

が出来た。善悪、賢愚、男女、老少を問わず、一切のものが、唯自己全体を打ち込む、至誠生活によって救われる。
しかして至誠とは、如来心そのものの回向である。